

特 243

136

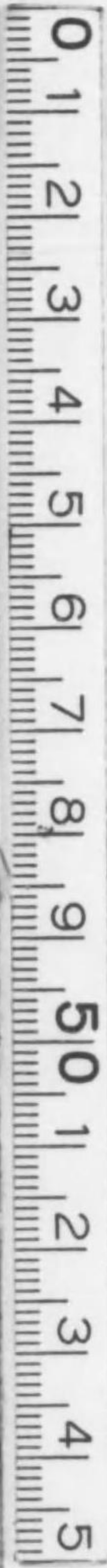
715

皇道の哲理

心

會

始



特243
136



道
の
哲
理

心
會



「心會」設立の目的

昨今、思想の統一が喧しく論議され、それに伴ふ種々の運動も起り、成果の見るべきものがあるが、なほ未だしと憂へられる點もある。議論は如何に華々しくとも、さて、本當に皇道精神を體得させることは容易でない。皇道精神の體得は、先づ我が國體の明確な認識にあり、天皇神聖不可侵の理を國民に、また世界に認識せしめ、皇道精神が、世界人類の幸福を招來せしめる所以を理解させる爲め、理論より實行、實行より信念に到らしむべき機關として、本會を設立するものである。

序

昨今の歐米諸國の情勢を観るのに、興亡變轉あはただしく、幾多の弱小國は一瞬に潰え去り、道義によつて締結された條約も條忽に破棄され、恫喝、教唆、欺瞞の外交と變り、國際信義とは如何なるものであるかを考へる邊もない程、混沌として歸するところを知らぬ有様である。果して、如何なる思想が彼等を指導し、彼等の平和を齎らすのか、誰れも確言できない。混沌と云ふ言葉が、これほど適切に感せられたことは、いまだ嘗つてなかつた。

然るに、東洋に於いて、着々、大東亞建設の實が擧げられてゐるのは、我が國が「皇道精神」をもつて之れを指導してゐるからである。皇道こそ世界の指導原理であり、これに依らなければ、世界の平和は斷じて達成し得られないのである。

皇道に關しては、今日まで諸種の見解が、著述に或は講演に、屢々發表されてきた。しかし、憲法第三條の天皇不可侵の理を明確にしたものが殆ど無いのは、甚だ遺憾に堪へない。この様なことでは、我が國民思想を浮動せしめるのみでなく、外國思想の影響を受けた

人々の間に、誤つた觀念が何時までも離れないのである。

そこで、天皇が絶対神であらせられる根本原理を、簡易明徹に説かれた、熊崎健翁先生の皇道の哲理および絶対性原理の哲學を以つて、皇道を明らかにし、國體明徴に些か資したいと思ふのである。

熊崎健翁先生は、既に十數年に亘り、國體明徴の爲め絶対性原理の哲學を提唱せられ、著述、講演等に於いて、皇道思想の顯揚に熱意を傾注せられ、「皇道の生命」「國民精神讀本」「心道教獻」「惟神皇道」「心大義」「國旗・皇道・正中思想」等の著述がある。就中「惟神皇道」「心大義」は、畏くも

天皇陛下

皇后陛下

皇太后陛下

各宮殿下

の天覽、臺覽の光榮に浴され、絶対性原理の哲學と皇道哲學は、いまや識者の間に認

識されつゝある時、先生の御承許の下に「心會」を設立せんとし、茲に、先生の思想および學說に則り、その概略を體系的に編著して世に贈らんとする次第である。

皇紀二千六百一年七月七日

中島章順

るやうに、凡ゆる物象は相互に密接な關係をもちながら、時間的、空間的に變化移行してゐるのであつて、一定の原理法則に従つてゐることが分るのである。

このやうな宇宙の大原則は、固より人間の世界にもその儘に當て嵌るのであつて、我々の日常生活や精神思想の上に密接な關係を生じ、世界各國の盛衰消長となるのである。凡そ如何なる思索も、宇宙を離れてあり得ないし、如何なる原理も、この大原則を忘れては成り立たない。科學が如何に自然を征服したと云つても、それはたゞ神の法則を適用して、或る形の變化を行つたのに過ぎない。故に、人間の生活を譬へて見れば、水族館の水槽の中を泳ぐ魚のやうなものである。また、大空に上つてゐる凧のやうなものである。如何に自由を求めても、水槽の外に飛出せば、却つて自由を失ひ、糸が切れては凧は轉落するばかりである。水は、恰も社會のやうなものである。水槽は、國家のやうなものであり、水族館は、宇宙のやうなものである。

想ひこゝに到るとき、我々日本人は今更の如く、天孫降臨の神聖に胸を顫はせ、肇國の悠遠にして森嚴なるを仰ぎ、翻つて 神武天皇御即位の盛業と、六合を併せ八紘を統ぶるとこ

ろの遠大な御詔勅を追懐し 崇神 仁徳の聖恩の宏大に咽び 應神 神功の雄圖を讃へ、或は、聖徳太子の大化改新を偲び 後醍醐天皇建武中興の聖業を回顧し、また列聖の遺徳を奉頌すると共に、歴史の精華たる忠臣、烈士、義人を讃嘆して、武士道の復活、日本精神の勃興を祈り、皇道の不滅の輝きを知り、かくして、明治維新の大業を経て、昭和回天の偉業を思つて、俄かに、心身勇躍鼓動するを覚え、我が大日本皇國に對する天の寵遇の如何に厚いかを、感謝せざるを得ないのである。

まことに、「皇道」こそは世界に最も優れた「神の道」であり、最善至上の理想道であつて、全人類の眞の平等と、世界永遠の平和を齎すべき大調和を明示するところの天の命意である。この道を歩めばこそ、我が皇國に對し、天の恵みが厚いのであつて、斯くの如き崇嚴な天の命意が、何故我が皇國にのみ下つたのであらうか、また、斯くの如き神聖なる使命を帯びる我が皇國は、如何なる天佑神助を得て、今日の機會に臨んでゐるのか、今こそ我々は深甚の思ひを、此處に至さねばならないのである。

およそ、宇宙間の森羅萬象、中心、中樞の無いものはない。中心と云ひ、中樞と稱するの

は、哲學的に云へば眞理の本體であつて、その本體が動いて陰陽の二面となり、動靜の二態となるのは、天の原則である。國家にあつても、國本の中樞が發して、一方に國家精神となり、一方に國家體制となる。我が皇國の太古を顧みるに、宇宙創成神たる 天之御中主大神の御力が發して、陽の靈たる 高御產巢日神、陰の靈たる 神產巢日神とならせ給ふのである。すなはち、主宰獨一の大神が、二様の結靈を靈動させ給うて、顯幽交錯、出沒變轉、以つて、天地萬物現れ、森羅萬象に生命を賦與し、各々その本領を發揮せしめ給ふので、この積極に、また消極に結ぶ、產巢日（むすび）の法則は、時間、空間を貫通して、天理人道、一つとしてこの法則の統御を受けないもの、ないことは、先きに述べた通りである。

我が皇國は、實に、この様な「天地の眞實の道」によつて成つた國家である。故に 天皇は 天之御中主大神から 伊邪那岐、伊邪那美二神 天照大御神から一貫する、神の御直系であり 天皇即 天照大御神即 天之御中主大神であらせられ、絶對御神格であらせられることを理信せしむるところの、皇道が、我が皇國の進むべき誠の道であり、所謂、忠孝一本の大道であつて、神意に本づく、最高の理想と實行との一致である。従つて、この道に曇り

四

があるやうなことは、斷じてあつてはならないのである。

國體の明徴が、近年喧しく唱へられるやうになつて、機關説のやうな誤つた思想は、抑壓されたけれども、なほ消し盡されたと云へない原因は、從來、このやうな學説を壓伏するだけの、確乎たる學説、理論が無かつた爲めである。それは、我が皇國は神世時代から「言あげせぬ國」と稱して、皇道に條理一貫した經典が無かつたからではあるが、國體明徴は、飽くまで、皇道の闡明に俟たねばならぬのである。そして、皇道は我が神世時代の歴蹟を、宗教的、哲學的に確認しなければ徹底しないのである。

一、皇 道

六

「皇道」には定つた經典が無い。それは古代の人達が天地の道を、自然の經典と心得てきたからである。しかし、古事記、日本書紀、その他の古い文獻に表れた神話の、哲學的、論理的寓意と、日本民族の、生命から生命に傳承されてゐる歴史的事實とによつて、それは十分窺ふことができるのである。そして、その宇宙觀なり、國家觀なり、乃至は人生觀なりが、世界のどの哲學よりも論理的に徹底し、それが明瞭^{はつき}り歴史の事實に現れてゐるのである。

ところが、古來熱心に皇道が説かれ、日本精神に就いて述べられたにも關らず、皇道の根本義或は日本精神が、論理的に明快に、説明されたものが皆無であつたと云つて宜いのである。かの正氣の歌を詠じた水戸の志士藤田東湖でさへ、「天地正大の氣粹然として神洲に鐘^{かね}まる」、また「苟くも大義を明らかにし人心を正さば皇道何ぞ興起せざるを患へんや」と云ひながら、神代のごとは茫莫として知る能はずと嘆いてゐる。

ところが、却つて外國の研究者の方が、皇道の眞價を發見してゐる。三十餘年前、或るドイツ人は「日本の皇道こそ世界の指導原理であり、動亂に動亂を重ねた歐羅巴は、やがて日本の天子様によつて統一される時が来るであらう。」と云ふやうなことを豫言し、また先頃物故して、その骨を永久に日本の土に埋めた、神道の研究者として有名なメーソン氏は「日本の永久的國寶」であると、著書に記してゐる。そして、「日本人は、いまにして自覺しないならば、却つて歐米人にその大精神を奪はれることになるかも知れない。」と、警告してゐるのである。しかし、これらは、例へば富士山の眞の美しさは、遠く離れて眺めるときは誰れでもそれを見ることができが、山に入つて、この美しさを發見することは困難であるのと同じやうなものである。

尤も、また神話には傳説があり、隱語があつて、その正確さを疑はしめる點もある。けれども、それが爲めに古典の眞實を否定せんとしたり、或は支那文學によつて潤色されたものであると唱へたりする、不都合な國學者を出すに至つたことは遺憾である。我が國の古典は、惟神の道を哲學化したもの、哲學的に説明し得るもので、これを見るには、人倫よりも

七

崇高なる神倫よりしなければ解らないのである。

皇道の意義

「皇道」とは、これを一口に云へば、「神ながらの道」「宇宙の相すがたそのまゝの道」「絶対に對立なき眞實の道」である。

「道」の字は、支那二千餘年前の古書「爾雅」に、「白玉これを皇といふ」とあり、「大いなるなり、靖んずるなり、美なるなり」と、説いてゐる。「白」の字は、太陽が光線を放つ象で、「王」の字は、元「玉」につくり、天地の間に大の字を書くのを古文とし、その形は天人地三才を貫く象で、宇宙の象徴である。「道」の字は正しい方向を示すことを意味し、「神ながら」と云ふことを、平易に解すると、宇宙そのまゝと云ふ意味である。また、皇道を「眞實の道」と云ふのも、天地自然そのまゝの相のことで、哲學的に云へば、宇宙の眞理、法則そのものである。

故に、世界諸國の中で「皇國」と稱し得るのは、我が國の外には無いのである。従つて、

眞に我が國體を明らかに言ひ表はすには「大日本帝國」では不十分で、「大日本皇國」と云はねばならぬのである。固より帝國憲法とか、或は御詔勅等には大日本帝國とあり、それが間違ひであると云ふのではないが、命令支配と云ふ意味のラテン語「インペラール」を語源とする「エンパイア・オブ・ジャパン」を翻譯して「日本帝國」と稱へ用ひられるやうになつたものである。しかし、日本は、決して支配者又は命令者のやうな、單純な権力者によつて支配されてゐるのではなく、後に述べるやうに、至善、至美、至大なる神徳の御實體であらせられ、天照大御神の御裔であらせられる、明津神、天皇の治食す大家族國家であるから、これを完全に言ひ表はすには、どうしても「皇國」と云ひ、「天皇」と申上げねばならぬのである。

皇道の哲學

昔から、天神七代、地神五代と云ふことは、國體を研究し、神の道に携はるものゝ誰れもが云ふことであつて、御神名も明らかであるが、その御神名の起源由來を研究し、これを哲

學的に思索したものが無いのである。そんなことでは、我が國が「神國」である所以を知ることができない。そこで、次に、古事記による天神七代、地神五代に就いて解説するが、これを細説しやうとすれば非常に複雑になるから、こゝでは、極めて分り易く圖に表して説明することにする。(以下、天神七代、地神五代が菊花御紋章圖に表徴されたる説明の、演述又は轉載を禁ず。)

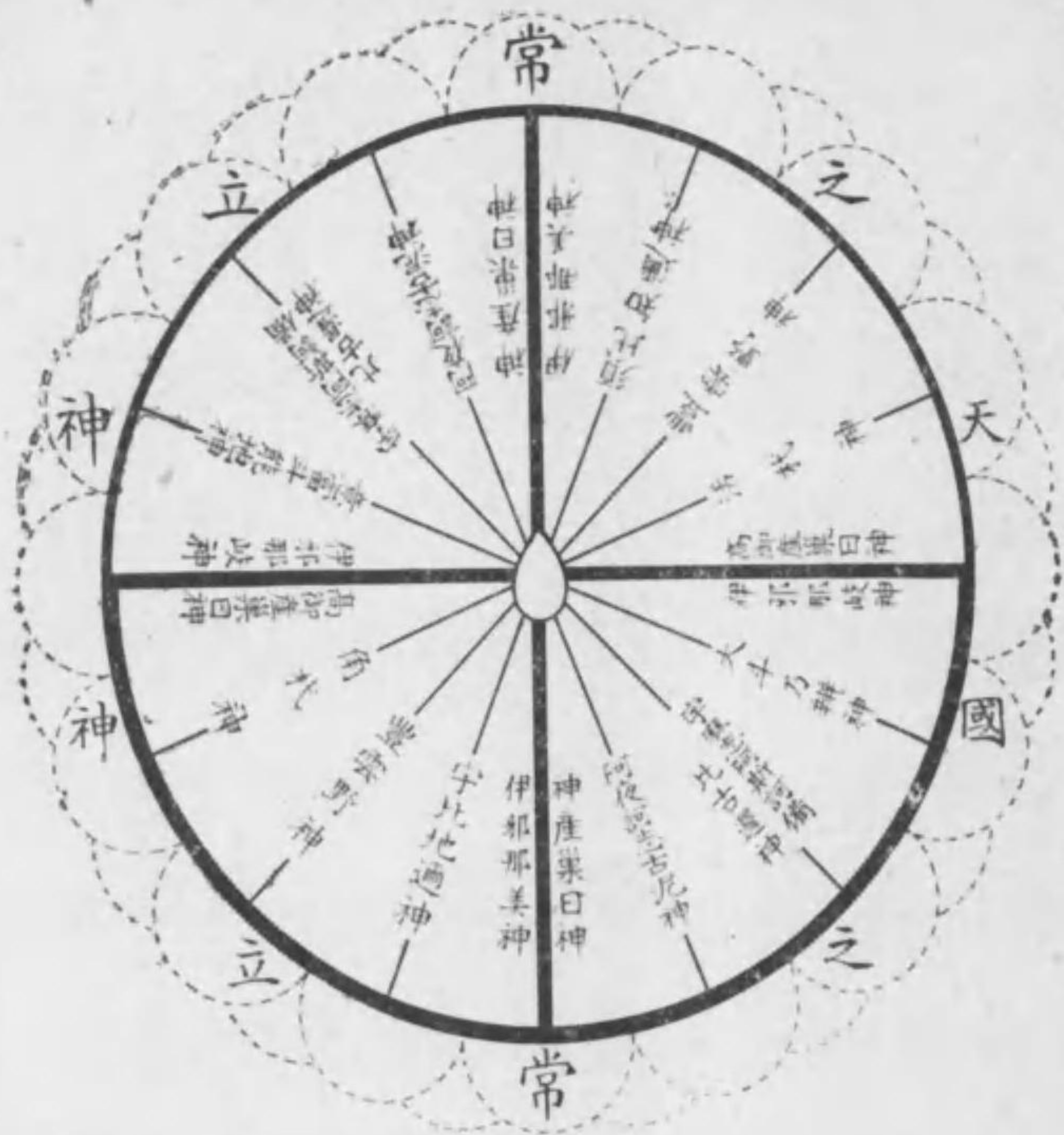
古事記の上卷に(括弧内の御名は日本書紀による)

『天地の初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神。次に、高御產巢日神(高皇產靈神)。次に、神產巢日神(神皇產靈神)。

此の三柱の神は、並獨神成りまして、身を隠したまひき。

次に、國稚く、浮脂の如くにして久羅下なすたゞよへる時に、葦芽の如く、萌え騰る物に因りて、成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神(可美蘆芽日凝地神)。次に、天之常立神。

此の二柱の神も獨神成り坐して、身を隠したまひき。



天神七代 地神五代 圖解

中心の「一」は隱身の神祖 天之御中主大神、顯神の皇祖 天照大御神の神位で、神皇直靈一貫して明津神天皇の皇位を示す。

(轉載を禁ず)

上の件、五柱の神は、別天神。

次に、成りませる神の名は、國之常立神。次に、豊雲野神（豊斟淳神）。

此の二柱の神も獨神成り坐して、身を隠したまひき。

次に、成りませる神の名は、宇比地邇神（泥土煮神）。次に、妹須比智邇神（沙土

煮神）。次に、角杙神。次に、妹活杙神。次に、意富斗能地神（大戸道神）。次に、

妹大斗乃辨神（大戸邊神）。次に、淤母陀琉神（面足神）。次に、妹阿夜訶志古泥神

（惶根神）。次に、伊邪那岐神（伊弉諾神）。次に、妹伊邪那美神（伊弉册神）。

上の件、國之常立神より以下、伊邪那美以前、併せて神世七代と云す。（上の二柱は

獨神、各一代と云す。次に、雙びます十神は、各二神合せて一代と云す。』

と、記されてあり、一柱一代、隱身の超自然神七柱を、天神七代と云ひ、以下、妹背の二

神を合せて一代とする、顯身の十柱の自然神を、地神五代と云うてゐる。

いま、上述古事記の記載を説明すると、天地初發云々は、「悠久の始なき始、いまだ天なく、地なく、物なく、象なく、茫莫たる空虚の中に、作りしにあらず、造られしにあらず、

自づから忽然」と成りました、自然發生の神の御名を 天之御中主大神と申上げる。「天之」とは宇宙の意であり、「御中」とは真中（中心、中樞、中核、核心）、「主」とは大知（うし）で、主宰の意であるから、天之御中主大神とは、宇宙の真中に在します創成原始神であり、全體を主宰し給ふ主宰神であると云ふ意味である。

この何にもないところに成りました 天之御中主大神を中心にして、空間的に、有形に結び化し給ふ御力が 高御産巢日神であらせられ、陽の御働きが初めて現れたのである。次に、時間的に、無形に結び化し給ふ御力が 神産巢日神であらせられ、陰の御働きが初めて現れたのである。このやうな陰陽の御働きのことを「産巢日」「産靈」「むすび」と云ひ、自生作用、創造の活きを云ひ、靈を産むのではなく、産む靈、創造して行く靈であり、變化して行くことである。自らの力で生成發展して行く作用である。 天之御中主大神 高御産巢日神 神産巢日神の三神を「造化三神」と申上げるのは、こう云ふ御働きがあるからであつて 高御産巢日神 神産巢日神の二神は 天之御中主大神の二つの御本質の顯れと解するのである。そこで、要約して、繰返へして云へば 天之御中主大神は大宇宙形成の根本中心即宇

宙全體の原始主宰神であらせられ、全體を司る靈であり、生命の根源であり、宇宙構成の最大の原因である。宇宙は、この根源から 高御産巢日神 神産巢日神の御働きによつて生成、發展して 天神 地神の關聯作用を経て、天地、日月、星辰となり、森羅萬象となつたのであつて、宇宙全體が天之御中主大神の顯現であるから、宇宙の中心は即ち宇宙全體である。

既に、陰と陽とが現れると、こゝに陰陽作用して別の「力」が生ずる 宇麻志阿斯訶備比古遲神は、恰も蘆の芽の如く發生し給ひ、「天地初めて割判」(日本書紀の説明による)の機會がきたのである。すなはち、「清み陽なるものは、薄靡きて天となり」 天之常立神が現れて天理恒常の道を統べ給ひ、「重く濁れるものは淹滞きて地となる」 天之常立神は地法、物象不變の理を司らせ給ふのである。かうして、天地分れ、陰陽位を正しうする時は、陰陽交錯し、天地を繋合する氣體であるとか、水蒸氣とか、雲であるとか、天地間の萬物ができる機會を生じ、すなはち人位である森羅萬象ができ、豊雲野神の御現れとなり、本來一であつて二となつた天地交通の靈を統べ給ふのである。

いま、これらの御順序を前掲の圖表に就いて見ると、大宇宙中心の一元から八方に擴がつたものである。中心點から出發して此の形象ができてゐて、一見中心と部分のやうに考へられるけれども、これは全部、中心の發現に外ならない。この中心から八分條をなすものは天神七代の御神力を顯出するものと考へられる。天神七代の神は、御一柱を以つて一代とする隱身の神で、大宇宙御工作の第一期は 天神七代の御稜威によつて完成せられたのである。隱身とは、氣化の御神靈と申して宜い。次に 地神五代の御働きとなるのであるが 地神五代となると、陰陽御二柱の神を以つて一代と仰ぐのである。その御發現は、一番初めに 宇比地邇神、妹 須比智邇神が現れ給ひ、泥や砂をつくつて地球固成の源をなし給うたのである。その次に 角杙神、妹 活杙神が現れ給うて、樹木や果物のやうな骨格や形體の化育を司らせ給ひ、次に、意富斗能地神、妹、大斗乃辨神が現れ給うて、陰陽のことが漸く具體化し、生殖機能も稍々具つた生物的體裁を整へるまでに、生成發展してきたのであるが、その次には、四肢五體、面貌具足し給へる 淤母陀琉神、智情意を完備し給へる 妹 阿夜訶志古泥神が現れ給ひ、茲に、天地全く成り、萬象具はり、動植物繁茂して、人類發生の段階に入り、完全な人體としての神であらせられる 伊邪那岐 伊邪那美の御二柱の神が現れ給

ふたのである。そして、この御二柱の神は、高御産巢日神、神産巢日神の氣化の神靈から體化された神で、高御産巢日神、神産巢日神が、そのまゝ、身體を具有し給うて御顯現になったものである。

斯くして、宇宙の中心にあらせられる、天之御中主大神は、體化神、天照大御神として御發現あらせられ、論理的に、天之御中主大神から演繹布衍され、天神から地神を経て、天照大御神に歸納集約せられるのである。

この、地神五代の神々の御働きを、順を追うて更に圖上に示せば、天神七代は、天之御中主大神を中心に八紘、地神五代は十六方に遠心的に光被し、天照大御神から歴代、萬世一系の、天皇へ、天之御中主大神即、天照大御神即、歴代天皇に神皇直靈一貫して十六光條の核の御位地にあらせられ、無限無極に大稜威を光被し給ふのであつて、天皇こそ、宇宙の主宰神に在しますのである。

この、天神七代、地神五代の神鎮ります表徴の圖に、單辨を附し奉れば、平面的十六辨菊花章を、複辨を附し奉れば、立體的十六辨菊花章を顯出することは、まことに有難く、畏き

極みであつて、我が國が神の御國であることに斷じて間違ひはないのである。

紋章學上、菊花御紋章を、菊花であるとしてゐるが、植物學に於ける菊花は、必ずしも十六辨と定つたものではなく、また菊卉は本來支那特有の植物で、仁徳天皇の御宇に渡來したものであると傳へられてゐる。故に、菊花御紋章を菊花であるとするこゝろや、菊花章の御制定を、後鳥羽上皇の御宇であるとするこゝろは、何れも首肯し難いところであつて、神世時代の諸神の神靈、すなはち宇宙の精神を表現されたものと拜察するのである。これに依つて我が國が中心即全體、全體即中心として一切が統一體系であり、家族制度も社會組織も國家體制も、悉く、此の原理に本づいて未來永劫無終に存續して行き、正に、天壤無窮の神國である事實が明瞭となるのである。

皇道 の 科學

叙上のやうな皇道の宇宙觀を、近代の科學智識の範圍に於て説明するならば、天之御中主大神は中性子であらせられ、陰陽の電子は、高御産巢日神、神産巢日神であらせられる。産

巢日の作用は、陰陽電子の離合集散によつて成る、物質を生じ 天神七代 地神五代の過程を経て、天地萬物を構成し、生成化育發展せしめるのである。固より、宇宙生成の神秘な力は、唯物的な観察によつて解決できないから、その説明は物心一如の態度を以つて、今後研究される眞の科學の發達に俟たねばならぬのであるが、現在までに到達し得た、科學の研究によつて見ても、古事記の冒頭神代記の一章句を、十分理解することができるのである。

日本の古典が立派な科學書であり、その中に、このやうな萬物進化の理が示されてゐることは、まことに驚異の外ないのであるが、中性子もまた神の力によつて生成されたものであり、作用とか、現象とか云ふことも、一切が神意の御働きであることを思ふとき、神を否定することは不可能である。神と云ふ字は、昔は示篇のない「申」を用ゐたのであるが、電の字の雨冠を除き、眞中の棒を眞直ぐにしたのが、申の字である。これは太古の人が電氣を畏れ敬うて、神と思つたからであるが、その電氣を存在せしめられた力、電氣を變通自在に陰陽の働きをなさしめられた力、またその陰陽の働きによつて、萬物を組立てられた力が何處にあるか、この疑問を解決するものが神であることを、我々は深く考へねばならない。か

の有名な相對性原理の主唱者であるアインシュタイン博士も、神の自性、自生作用を否定することができず、「宇宙の膨脹」を發表し、宇宙の絶對を認めてきたことは愉快である。やがて、相對性原理は絶對眞理から生ずる現象なることを認めるに至るであらう。

このやうにして神の存在を認めるとき、一切萬有が一元の眞理から出發すると云ふことが明瞭になり、最大の太陽系も、最小の電子界も、その法則が軌を一にしてゐることが肯定され、神の御心がどう云ふところにあるかと云ふことも、理解されてくるのである。さうなれば、人間の實際生活、國家社會の生活も判明してくる。中心立ち、遠心求心の理これに従ひ、中心即全體、全體即中心の原理により、人間は先づ心に中心を立てねばならぬ。心に中心があればこそ肉體を有し、生活に則を保つことができるのである。もし人間に中心が無かつたならば、人間として價値のないものである。かうして、一家には戸主たる家長があつて、時間的には、その生命を祖先から傳へ傳へて、子孫に一貫し、空間的には、一族一門の親和する理論も立ち、市町村にも、團體にも、國家にも、それ／＼中心があり、遠心求心の和合があつて統一される所以も分り、一國に君主あり、萬民喜んで君主に歸一し奉り、奉公

の誠をつくす意味も、明らかになつてくるのである。

皇道の宇宙観

古代の人達は、天地をもつて宇宙と考へ、宇宙全體が國であると思つてゐた。國常立尊の御名があり、宇内と云ふたりするのは、さうした考へからでた言葉である。宇宙の「宇」の字は、「大いなり、天地四方上下なり、屋なり」とあり、「宙」の字は、「天地之虛、萬物之裕、居なり」とあるから、「宇宙」とは、天地四方上下、無限の時間空間を有するもの、謂である。

皇道に於いては、この宇宙をそのまゝ神と観るのである。すなはち、宇宙萬有は神の自性、神そのまゝの御顯現であり、人間も宇宙神の分靈である、と云ふ徹底した一元的宇宙観である。キリスト教などでは「神は造物主」であると云ふやうに考へるから、それでは、神は宇宙の外にあることになり、相對二元的となり、神に對し全智全能と云ふやうな性能を與へねばならぬことになつて、統一ある宇宙観は生れて來ない。

宇宙創成の始、天なく、地なく、物なく、象なく、茫莫たる、始なき始に、忽然と獨神成りませる神が 天之御中主大神であらせられる。宇宙の森羅萬象は、この根本中心であり、全體を司る靈であり、生命の根源であり、最大の原因であらせられる 天之御中主大神から、産巢日二神の御働きによつて生成化育發展して、永遠に「修理固成」が行はれるのであつて、このやうな働きのある宇宙が生命體であることは明らかである。皇道の宇宙観は、宇宙原始主宰神であらせられる 天之御中主大神の絶對を信じると共に、宇宙の生命を認めるのである。このことは、宇宙生成化育の過程、修理固成の有様である神の御名に明瞭に現れてゐるのである。

このやうに神を知り、信じることから皇道の靈魂観が生れる。宇宙観は、全體、大我、大自在、靈であるが、靈魂観は、個人、小我、自在、分靈であり、これが渾然一つになつた天人合一、物心一如、大如全一の相が皇道である。人間は宇宙神の分靈であるが故に、空間的の高御産巢日神と、時間的の神産巢日神の體化神であらせられる 伊邪那岐 伊邪那美二神の組合はされた中心に、永遠不滅の人間の生命が生ずるのである。さうして、神の靈の

波動が人間の生死の状態になるのである。

天之御中主大神の絶対を信じ、宇宙を生命體と見る皇道の宇宙觀は、宇宙生成の原理を認めることであつて、眞理を離れては宇宙も、物體も、心も、一切が存在しないのである。従つて、皇道の國家觀も、世界觀も、人生觀も、凡ては宇宙觀の根本に歸一されるのである。

皇道の國家觀

「皇道」は絶対性原理である。外國の哲學思想の相對的理論を以つて、我が國體は解説できない。何故ならば、外國には、一つとして日本のやうな「國家」がないからである。國家と稱するのは、國全體が一つの大きな家のやうなものであると云ふ意味で、國內は家族のやうに仲良く生活すべきである。「浦安の國」と云ふのは、「ウラ」は裏、内の意、すなはち國民が、皆その所を得て安らかに暮らしてゐると云ふことで、「萬邦をしてその所を得しむ」と云ふ、御詔勅の大御心もこゝにあるのである。従つて、外國語の「ステート」とか、「シユタート」とか云ふ言葉がもつ領土とか、州とか、區域と云ふやうな意味は少しもない。

のである。日本は法治國でもなければ、徳治國でもない。日本は、皇道の大義で治められる「道治國」である。

すなはち、その國家觀も亦宇宙觀と同じやうに、徹底した一元的見解に立ち、宇宙の眞理と調和すると云ふことは、天照大神から神皇直靈一貫、連綿たる皇統を御繼承遊ばされた明津神、天皇を中心と仰ぎ奉つて、國民齊しくその下に集つて堵に安んずるのである。凡そ物の形態を保つ爲めには、遠心力と求心力の調和を要することは、物理的に説明できる。日本の國家も、遠心的に、天皇の御稜威と、求心的に、國民の至誠の調和によつて健全な發展を遂げるのである。天皇は、天神諸の御心をそのまゝの大御心をもつて、國民に各々その所を得しめ給ひ、

「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス」

この、御仁慈を以つて政事を中心となし給ひ、國民は、各々その天性と才能を發揮して、天皇に歸一し奉り、大調和的の全家族國家を完成することが、日本の國家の國家たる所以である。故に、天皇あらせられずして、大日本皇國の存在しないことは自ら明らかであらう。ま

た、國體明徴は皇道の闡明にあり、皇道の認識は日本古代の歴蹟を宗教的に、哲學的に認識し、これを信念として徹底することであることも、自ら諒解されるであらう。

天皇が、現人神、明津神であらせられ、絶對の御神格であらせられることは、皇道の根本精神であつて、宇宙の眞理である。故に 天皇が實祚を繼がせ給ふ御儀式大嘗祭は 天皇御親ら行はせられるのである。天皇は御踐祚と同時に 天之御中主大神の御神徳を御繼承遊ばされるが、大嘗祭は肉體的にも神と御一體にならせ給ひ 天照大御神と御一體にならせ給ふ、御一代御一度の御儀式である。天照大御神は政治と信仰の中心であらせられるが、天皇に國家統制の主權と宗教の神權がお在りになることは、憲法第三條に明示され、祭政一致の義が定つてゐるのである。故に 天皇親政は 天照大御神神政の國體を意味するのである。政（まつりごと）とは、皇孫の「治食す」（しろしめす）御統治で、上から下へ給はる向下的の恵みであり、祭（まつり）とは、「服ふ」（まつらふ）で仕へ奉ること、下から上へ仕へ奉る向上の誠である。「恵み」とは、芽が生えるで、すなはち生成化育 天皇の御心のことである。この向下的の恵みと向上の誠とが、自然のまゝに一致するのが、所謂「祭政一致」である。

外國の皇帝、君主の即位式が、このやうな深い意義をもたないのは、その國體が根本的に相違するからである。例へば、戴冠式は帝王が寺院に向いて、大僧正に冠を戴せて貰ふので、皇帝よりも僧正の方が上位である。皇帝は物質界、俗界の支配者で、僧正は精神界、眞界の支配者となつてゐる。また佛敎國の灌頂の式は帝王が改めて佛弟子になる儀式である。

このやうな、我が國の國家觀を一層明瞭に理解する爲め、いま假りに、國家を有機科學的に、人身生理に當て嵌めて考察して見ると、次の如くなる。

肉體の筋肉や内臟等を組織する細胞を、一般國民とし、神經の細胞を行政官公界とし、腦細胞を大臣參議閣僚界とすれば 天皇は申すまでもなく精神、すなはち生命としての御存在であらせられる。生命力の體化が細胞であり、細胞の結合が肉體となり、各細胞の力が精神力となつて現れる。故に、どの部分の細胞が弱つても、病患に罹つた状態になり、氣力を喪失する。國家に於いても同様の状態になる。各細胞は常に鍛鍊を要する。高度國防國家は、細胞の健全を必要とする。萬一外國思想の病毒に侵されるやうなことがあれば、腦細胞を侵されぬ間に、賦活の爲めに皇道精神の注射を以つて治療せねばならぬ。

現下の状態は、果して甲冑を身につけても堪へ得る健全な國家であらうか。大日本皇國は生きた國家である。ロボットの國家ではない。ロボットは、如何に巧妙に造られてあつても、ロボットはロボットであつて、精神が無い。生命のある人間（國家）ではない。故にこそ、一君萬民でなければならぬのである。君臣の和合は、國家の生命である。世界の和合が、世界を生かすのである。

皇道の人生觀

皇道に於いては 天之御中主大神は中心であり、靈であり、力であり、氣であり、生命であり、宇宙であらせられる。すなはち 天之御中主大神即宇宙であり、宇宙は生命體であるから、宇宙の分靈である人間の生命もまた不滅である。時間的には、生命から生命に繼承し、空間的には、相互に關聯をもつて多元的であるやうに思はれるが、根源は一つの生命の生成發展である。生命は、外から見れば物質的氣であり、内から見れば生命の本體靈であり、畢竟人間は小宇宙である。

宇宙の分靈であることが理解できると、初めて人間が他の動物と異り萬物の靈長であることが分り、人間である有難さ、幸福が感得できるのである。しかし、眞理を離れては宇宙も物體も存しないやうに、宇宙を離れて我々人間は絶対に存在し得ないのである。思索もまた宇宙の外には出られない。萬物すべて斯くあるごとく、人間も一定の法則下にあつて、相對的の所謂自由な存在ではない。我々は獨立に存在してゐるのではなく、それは宇宙眞理の支配下に神の御心のまにまに、宇宙の働きつゝある間の自覺であつて、時間的、空間的に相互關係をもつてゐるのである。故に、我々はまた個人ではなく、國家人である。

キリスト教などでは、神が宇宙を造つたと云ふ對立的な考へ方であるが、皇道では、宇宙の外部に神を認めず、宇宙自體が神である。宇宙には私が無く、無私のものであるから、人間も宇宙の如く私を無くし、宇宙の法則に隨つて生きて行くべきである。故に、神から授けられた使命を理解し、その力と智慧をもつて、凡ゆる道を正しく進み、この大使命を自分が完全に果すと云ふ力を、周圍隣人に及ぼして行くことによつて、自ら社會は健全となり、國家も富強となり、發展して行くのである。

宗教としての皇道

二八

我が國の「神道」は、皇道が具體化し、宗教的になつたものである。従つて 天皇に歸一し奉り、宇宙の眞實の道を信仰するのである。換言すれば、國家を安泰にし、世界を平和にし、人類の幸福を齎らす宗教は、皇道を措いて他にない。何故なれば、佛教には人生觀、社會觀はあつても國家觀がない。釋尊自身が國を棄て、山に入つたからでもあらう。キリスト教にも、博愛道德は説いてゐるが、道德だけでは世界は平和にならず、現にキリスト教國同志が相喰ひ争ひをしてゐる。教學的に見ても、儒教は「人倫」、佛教は「悟り」、キリスト教は「救ひ」を説き、何れも個人の慰めに過ぎない。

抑も信仰と云ふことは、天地の大道を信じて、宇宙間に於ける唯一至上のものに對して絶對の信を捧げて、心を集注せしめて行くことである。自分自身の確信、信念以上に自分の力でどうすることもできないものを信じ則ること、大きなものに歸一することである。哲學的論理で究めつくしたものを信じ則ること、すなはち理信することである。故に、智識の

ない信仰は眞の信仰ではなく、信仰のないものは人間の未成品である。

宇宙一元絶對眞理を神と云ひ、神は眞理の代稱である。そして、哲學的に思索し得る絶對虚無の、零の空間に忽然と發現し給うた 天之御中主大神の御神力が、産巢日の作用によつて生成發展し、次第に擴充し、愈々増大しつゝあるのである。宇宙の大精神あつて、萬物悉く中心に自我あり、自性を有し、茲に求心力、遠心力の作用を生じ、靜的に大如全一、動的に活動循環の法則を生じ、無始無終、自彊不息、生成化育する實相を顯現してゐる。この原理を知り、神の絶對力に委せ切ることが、宗教としての皇道、すなはち神道である。

道德とか、倫理とかを説く教學から、更に奥に進んだ大乘的精神が宗教であるが、宗教は世界人類共通のもので、普遍的に人類を救済し、幸福を齎らすのがその生命である。それならば、世界の三大宗教と稱せられるものは、果して人類を救済し、幸福を齎らしたであらうか。單り、宗教としての皇道、すなはち神道は、佛教、キリスト教、回教のもつ特長を包含する大宗教と云ひ得るのであつて、三種の神器は、すなはちその表徴である。これを表示すれば左の如くである。

二九

神鏡—明・眞	智—佛	教
曲玉—温・善	仁—キリスト	道義精神・日本精神
神劍—烈・美	勇—回	教

神道は、調和を強調する。調和とは神意を伺ふ意である。そして、神道の極致は、自己開發、自己創造にある。佛教の如く「一切空」でなく、天地宇宙は力の充滿である。神秘的な力があればこそ、新らしい生命が創造せられ、この新しい生命が創造されることが神道の極致である。故に、世界の宗教は、何れも唯物的思想の方だけが積極的で、教へは唯心的に偏し、消極的である。之れに反して、神道は、唯心、唯物に徹した一つのものとして生成開發する、積極的な、神人合一、物心一如の教へである。自力、他力の何れにも偏することなく、自他の調節、自力に始つて、他力に歸着するのが本當の道であり、言葉と心靈の躍動と行とが一致した、知行合一が眞の信仰である。

更に、言葉を換へて云へば、一元、二靈、三魂、すなはち 天之御中主大神 高御產巢日神 神產巢日神の造化三神の御働きを理信し、靈・心・肉（心・信・行）の三位一體の心境

を得ることが、安心立命の最高境地である。三魂とは、生魂（生成發展）、足魂（内部に行く力、充實具足）、玉留魂（統一して働かして行く、存在）の三つを云ひ 高御產巢日神 神產巢日神の御働きである。

このやうに、永遠の生命を認め、自己を創造して行く宗教は、まことに世界獨特で、皇道を宗教として觀ても、正に國寶である所以が明らかであらう。

二、皇道精神と日本精神

三二

皇道精神は、宇宙眞理の現れである。そして、先きに屢々繰返へして述べたやうに、國民の生命から生命に傳へてきて、大信念として存することは、歴史的事實に具體的に現れてゐることによつて明らかである。皇道は誠であり、その作用は大和全一である。三種の神器の象徴するところは、皇道精神の根柢をなすものである。昔から我が國を呼んで「言靈の幸ふ國」とか、「言靈の佐くる國」とか云ふのは、我が國が皇道精神に本づき、すなはち神意に従つて行動する國柄であるからである。皇道の本義は、大義名分、國體觀念の覺醒であり、日本肇國の根本義であり、一君萬民の理想である。この世界に最も優れた神の道、最高至上の理想道こそ、全人類の眞の幸福と世界永遠の平和とを齎らす大道を明示する天意である。民族學の小乘的な、消極的な考へを止めて、大乗的に人類の立場から考へるならば、八紘爲宇の意味が明瞭となつてくるのである。

皇道精神が基調となり、歴史の事實に色々の相となつて現れてゐる道義精神が、日本精神である。道義精神と云ふのは、祖先から繼承してきた世界平和の聖業を完遂することである。歴史は、過去の事實の思索によつて、現實を正視し、將來の生を強靱にすること、過去について知るのみでなく、明日の生への契機となるに必要な學問である。そこで、日本精神は自己の努力發展が、國家の發達に影響を與へる、大和秩序の皇道を基調とした道義的精神であり、皇道の根本理論を正しく認識して信念となし、これを實現することによつて、價值づけられるのである。人爲的でなく、歴史的に鍛へ上げられた精神である。故に、日本精神に發するものに、一切私利、私慾又は侵略的目的の入らないことは云ふ迄もなく、聖戰の意義も自ら明らかとなるであらう。

三三

三、日本學

三四

神世時代の哲理を究めて、これを理信し、古典に示された科學によつて、宇宙生命進化の大原理を悟り、天之御中主大神の絶対御神格を認め、この大原理が皇室に傳はり、精神が國民思想となり、國是となりて、永遠に續く事實を知ると共に、天照大御神から神皇直靈一貫する、天皇の御位置の儼として侵すべからざる所以を仰ぎ、天皇の御稜威は、遠心的に神の御心を光被し、國民は、求心的に億兆一心の至誠を捧げ、國家人たるの認識を深めて、神意に順應する本來の使命に邁進するのが、皇道に示された日本精神であるから、「日本學」もまた、この日本精神から離れては存在しないのである。

今日、「日本學」の提唱、確立が喧しく云はれ、それに關する著作も指を屈する邊のない程であるが、しかもその目標とするところは、極めて曖昧模糊とし、相對的、唯物的に偏し、却つて國體に對する理念を昏迷に陥らしめ、或は皇道の日本精神を不鮮明ならしめて、學問

の道を逸脱したもの、多いことは、甚だ遺憾とせざるを得ない。故に、この際「日本學」と云ふものゝ觀念を、明瞭ならしめて置くことは徒爾ではあるまい。

日本學とは、これを廣義に解すると、日本人であることを、自覺してするところの學問だと云ひ得る。すなはち、皇道を認識し、國體を理解し、日本の生成發展に寄與するところの學問の總稱であつて、求心的に外國文化を吸収し、日本化し、これを遠心的に外國に宣揚するに足る、十分なる基礎を有するものでなければ、これを日本學と稱することはできないのである。日本自らが改善して、強固となる爲めには、外國文化を攝取することも無論必要であるが、徒らに翻譯的化し、鵜呑みにしてはならぬ。咀嚼消化して日本化しなければならぬのである。

次に國民的意欲たる肇國の理想の昂揚に努めるには、皇道を明確に認識し、歴史的事實を正しく觀て、新たなる意志に本づいて實踐せしめること、國體觀念の覺醒が必要である。これが、狹義の日本學の對象となる。

「天皇機關説は、相對性學説獎勵の餘毒である」と述べ、又「今や、世界は悉く武裝時代

である。世界平和の爲めに力を盡すにしても、自ら強くする必要がある。他を頼まず、自力を以て志を遂行する力を養成せねばならぬ。物的に、武器、戦闘兵力の相匹適する場合、精神的に、思想統一を優越せしめる必要がある。すなはち、精神的武装が必要である」と。某氏が説いて居るが、大體に於いて、外國の思想は唯物的であり、功利的である。十八世紀の頃までは、精神至上主義の如くにも見えるが、實は一種の階級闘争であつて、宗教部門に屬する僧侶の専横に過ぎなかつた。要するに、争覇の業に終始してゐるのであつて、その基調となつてゐるものは利己的、個人主義的で、弱肉強食の姿であつたと云ひ得る。その間に、進化論が生れ、科學の發達があつて、物質的に、經濟的に拍車をかけたものが、弱小民族を壓迫搾取した歴史である。また、帝國主義もこれをどのやうに理論づけやうとも、結局、侵略と支配慾の權化である。個人の理性の尊重を説く歐米の人道主義とは、およそこんなものである。

民主思想とか、民本主義とか云つて、我が國でも大分騒がれたデモクラシーの思想も、要は民衆の意に投合して、政權を維持せんとすることであるから、政府の政策が齟齬すると、

それは民衆の總意から成つた政策が成功しなかつたのであると云つて、その責任は民衆が背負はされるのである。マルクス主義は、社會主義から發して共產主義に至るのであるが、人間を唯物的な存在視して、本然の性に基いて自然に發生する、精神文化をも否定し去らんとするのである。

これらの思想、主義はいづれも猶太思想の流れを汲み、猶太主義の策略であつて、猶太民族の怪奇な「選民思想」は全く天意を無視した思想である。猶太人は「我等こそ神の選べる民族なり」と信じてゐたが、キリストの世界主義の反撃に遇うて國土を失うに至つた。猶太民族主義は、世界を墮落させて、諸國の國力の消耗衰微を計り、彼等の選民感を満足させるのを目的とするに至つたのであるから、人倫に背いた殘虐行爲も敢へてし、野獸に等しく、到底神意に則應するものでなく、人類の敵である。しかし、キリスト教の愛も、大乘的、現實的でなく、小乘的、空想的であつて、調和のないところに自由、天國の存しない理を知らない。

このやうな、唯物論的な思想の傾向では、如何に人道主義が叫ばれ、平和論が唱へられた

としても、そこに世界の平和も、人類の社福も現れて来ない。思想は益々混亂に陥るばかりとなつて、遂に法治主義に立つ個人主義的世界秩序を打破し、生命主義に立つ民族的世界秩序を建設せんとする新しい理念の下に、ナチスが起ち、伊太利が立つに至り、我が國と獨伊の間に共產主義を排撃する、防共の三國同盟が締結されたのである。そして、このやうな情勢下に、いまや世界は擧げて、動亂の渦中に投せられてゆくのである。しかし、全體主義の祖國愛、愛國も排他的、偏狹的で、皇道の大調和主義に遙か及ばないことは云ふ迄もない。この時に當つて、皇道精神の昂揚は、益々切實に世界の要望となり、日本學の確立により、一層人類の社福に貢献しなければならぬ使命が痛感されるのである。日本の志ある人々が一日速やかに、皇道に本づく眞の學者的態度を取り戻せば、それだけ早く世界の人々が救済されるのである。そして、その使命を果し得る恵みをもつてゐる我等こそ、大きな喜びを感じねばならないのである。

四、大日本皇國の使命

神代 伊邪那岐、伊邪那美の二神に、天神の詔を以つて、この漂^{たふよ}へる國を「修理固成^{つくろひかたになせ}」と仰せられた。その時以來、宇宙の修理固成は、宇宙と共に永遠に續けられてゐるのである。「漂へる國」と云ふのは弱肉強食の世界を指し給うたもので、「修理固成」とは世界を平和にすることである。すなはち 神武天皇の天業恢弘「八紘爲宇」の道義精神によつて、弱きを援け、ま^まつろはぬものを討つて六合開都（日本書紀卷第三）することである。

故に、世界を平和に導き、人類の幸福を齎らすことは、我が肇國の精神であつて、國民の意欲となつて傳承されてゐるのである。そして、この神意に則應する世界人類の平和幸福は、我^{わが}國^の力^{によつて}行^はれるのである。理想の實現には一つの中心がなければならぬのであつて、日^に本^をこ^の中^心であるのである。

遠くは、文永弘安の役はその例を見るのであるが、近くは明治の皇政復古後、皇室を中心

として偉大な國の團結力を發揮したのは、明治二十七、八年の日清戦役と後十年を経た明治三十七、八年の日露戦役とである。その後大正時代には世界大戦に参加し、皇道が世界平和を目標とする所以を示し、昭和六年滿洲事變後滿洲國を建て、東亞新秩序建設の端を開いた。ところが、信義を以つて結ばれた筈の國際聯盟の強大國の專横を知るや、潔く脱退し、我が國独自の立場から、世界平和の爲めに邁進することになつたのである。

昭和十二年に至つて、支那事變が勃發したが、云ふ迄もなく我が國の力を以つて世界の平和の爲めに、ま。つ。ろ。は。ぬ。も。の。を。討。つ。爲。め。であつて、聖戰の意義はそこに存する。支那事變の武力的行爲は、道義精神の發露であつて、神意に服せぬ、即ち則應せぬものを討つことである。東洋平和を案す猶太民族主義に起因する、經濟的、思想的、武力的など、凡ゆる勢力を驅逐し、淨化（大祓祝詞）する戦ひである。また、内面的には世界的大家族を建設し、神ながらの大調和、世界秩序を顯現せんが爲めであるから、鬭争の爲めの鬭争でなく、私利私慾の征覇侵略の戦争でもない。抱擁力ある純情至誠を以つて、東洋平和に同意協力を求めてゐるにも關らず、それを妨げる蔣政權を討つてゐるのである。破。邪。顯。正。の。劍。を用ふるのも天意

であつて、一視同仁の意味を表はし給ふ 天照大御神の御名の如く、宛も天日が下界を照らすやうな、大いなる慈悲仁愛であり、眞實の力である。四道將軍を御差遣になつて戎夷を平げ給うた 崇神天皇の詔に「教を垂れて荒俗を綏くし、兵を擧げて以て不服を討つ」と仰せられてゐるのは、この御心をお示しになつたものである。「武」は文武のむすびの徳を表はし、畏くも 天皇は文武を統べさせ給ひ、我が軍人は「教化」を目的とするものであることは、この詔を拜しても明らかである。

このやうな聖業に従つてゐる、我々皇國民は、皇國の使命の彌々重大であると共に、益々責任の加はつたことを思ひ、覺悟を一層強固にしなければならぬのである。祖先から繼承してきた世界平和、人類社福の聖業完遂の爲めには、いかなる勞苦にも耐へ忍ばねばならぬ。日本魂は、この身、この心、我れの私にあらず、心身共にこれ一家一族一國と連り、世界人類と靈脈し、森羅萬象と關聯することを知るが故に、私心を去り、公心明らかとなり、邪慾の小我は消え、明淨直誠の心高く、犠牲奉公、盡忠報國の至心横溢し、凝つては百鍊の鐵となり、發しては萬朶の櫻となるのである。

今日、なほ行はれてゐるやうな外國臭の抜け切らぬ思想では、到底世界人類の平和社福を望むことはできない。それには、どうしても皇道主義が必要である。すなはち、皇道の理想を實現し、一舉一動が世界の模範となり、世界列國から畏敬されるやうな大日本を造り上げ、以つて世界救済の先驅となり、中樞となり、天業恢弘、八紘爲宇の聖業を完成するのが我が大日本皇國の大使命であり、その畏敬される根本は「勇斷」と「仁愛」とにあるのである。皇道を全世界に光被せしめ、皇化を萬國に普からしめんとする、眞人道確立の天意遂行を妨げんとするものあらば、斷乎として戦ふばかりである。大宇宙の精神を人類社會に顯現せんが爲めの、已むを得ない仁義の行爲、大義名分、光風霽月、慈悲仁愛である。

畏くも 明治天皇の御製

國の爲め仇なす仇は碎くとも

いつくしむべき事な忘れそ

おのづから仇の心も靡くまで

誠の道を履めや國民

を拜誦するとき、大御心の尊さに今更の如く頭の下る思ひがするのである。

「自分は日本人だ」と云ふ平明な意識をもつて、「國家の爲め」には死を恐れぬ、一人の日本人の國家意識を涵養し得る皇道思想、哲學は世界の何處にもない。科學的研究を以つて能事終れりとするならば、思想的害悪と危険は寔に棘然たらざるを得ない。それは社會の罪ではない。各自一人々々の自覺した生活が、國家の隆盛、延いては人類の社福を齎らす所以である。我が神道では「永遠の生命」と云ふことを云ふが、これは時間的には、無始より連続してきた生命は祖先から自分に、それから子孫に無終に連つてゐて、現實の幸福のみが幸福でなく、生命の延長である子孫の幸福を希ふことが眞の幸福であり、又、空間的には、自分の幸福のみが幸福でなく、お互に關係のある世界と喜びを共にすることが、眞の幸福である。云ふ意味である。

五、「↓」に就いて

四四

「↓」の哲學に就いて述べる前に、古事記冒頭記載の 天之御中主大神の御名を拜察すると 天之御中主大神は、天地宇宙の森羅萬象がまだ定らず、何も無い「無」の中に、忽然と「獨り成りませる」御神靈であらせられる。いま、御名を仔細に檢べると、

「天」——荀子曰「天無實形」云々。邵子曰「自然之外別無天」。絶對。無。空虚のこと。

「之」——説文「出也」云々。古字「出」。接續詞。

「御」——説文「使馬也」。正韻「統也」。尊稱。

「中」——「心也」。「内也」。「滿也」。「要也」。「正也」。中心。中核。全體。

「主」——「宰也、守也、宗也」。易繫辭。「樞機之發、榮辱之主也」。「大知」。大國主尊、事代主尊、經津主尊等の「主」である。象は、土の上に燈明皿があり、その上に一燈が點せられた形である。統轄するの意。

「大」——「天地者形之大、陰陽者氣之大、又初也」。説文「天大、地大、人亦大、象人形」。「神」——説文「天神引出萬物者也」。徐曰「申即引也、天主降氣、以感萬物、故言引出萬物」。古字「申」。絶對の力、靈氣、生命のこと。

これらの意を綜合すると、天之御中主大神は、「空虚の中に現れた萬物創成中心の靈で、全體を司る絶對の力」の意味である。そして、その絶對の力が現象の原動因子となつて「産巢日」「産靈」(むすび)の働となり、天神地神の眞理法則の過程を経て、宇宙を生成し、萬有となつたのであつて、宇宙萬有は、中心神 天之御中主大神そのまゝの御顯現であるから、宇宙の中心即全體である理が明らかとなるのである。

天地日月は勿論のこと、宇宙森羅萬象悉く、未だ無い空虚に「獨り成りませる神」 天之御中主大神は、形而下的物象の日月星辰、人獸鳥魚草木等を以つて表はすことはできないし、また想念に於いて、數的一、二或は零を以つて表はすことも、數が相對であるから絶對神の表現には適切でないのであつて、人間に與へられた智識の範圍内では 天之御中主大神の表現を「點」「↓」とする以外にないのである。それならば、何故「↓」が絶對神 天之

四五

御中主大神の御本質を、完全に表現し得るかを説明することにす。

「ㇿ」は、文字の上から云へば、六書正譌の「古文主字 鏡中火 ㇿ也 象形借爲主宰字」とあり、主の古字であることが記されてゐて、「主」「室」「宰」の頭の點であつて、説文の「鏡中火 主也 從王象形 從 ㇿ 去聲」とある如く、「チュ」または「シユ」と讀み、天之御中主大神を ㇿ 神と申すことができるのであるが、苟くも神を物象的に論ずることは、固より不徹底を免れないが、形而上下に亘る理解に便する爲めに些か解説を施せば、次の如くである。

「ㇿ」は神であり、靈力であり、「ㇿ」は宇宙であり、萬有であり、「ㇿ」は眞理法則である。また「ㇿ」は零數の根源であり、現代科學智識の範圍内では、ユークリッド幾何學に於ける「點」である。その定義によれば、點は巾もなく、長さもなく、厚みもなく、位置だけが有り、點の延長が長さとして位置を有つた線となり、線が前後左右等に動いて、位置と巾と長さをもつた面となり、面が立に動いて位置と巾と長さともつた形體、となるのである。「ㇿ」は、また電子説に於ける中性子であり、物理學に於けるエネルギーであり、

化學に於ける原子説の、原子であり、微生物學に於けるウイルス（濾過性病原體）である。しかし、科學は相對的のものであり、物質現象を扱ふものであるから、こうした現象に至るまでは何の力によつて起るかと思ふことを考へると、その以前に何かの力のあつたことが分る。それが「ㇿ」である。故に「ㇿ」は神であり、力の根源であり、森羅萬象であることが分るのである。

「ㇿ」は絶對から觀れば實體であり、相對から觀れば現象である。佛教で云ふ因果の因は絶對から觀た「ㇿ」であり、それが縁を経て相對の現象である果となるのである。「ㇿ」は、一家に於いては家長、一國に於いては君上、國の中樞の意にもなり、人間精神の中心、大宇宙の中心ともなり、その中心は生命則靈である。人心「ㇿ」を得れば、人生朗らかとなり、福壽全く、一家に「ㇿ」あつて、家門の榮を得、一國に「ㇿ」あつて、國土平安萬代に泰く、世界「ㇿ」を得て、眞の平和を得ることとなるのである。蓋し「ㇿ」は天然の相であり、人爲的でなく、自然そのものであつて、作爲的でなく、一切力の根源をなし、自然の律法、自然の秩序、自然の組織力であつて、萬法萬象の大如全一、物心一如となつた眞理の

表徴である。陽明子に「夫れ聖人の心は天地萬物を以て一體となす」とあるが、この萬物の一體は、すなはち「心」である。

大如全一と云ふことは、求心的、遠心的に大和融合して、渾然一如となつた相のことであり、これを部分的に見るときは、心身大和全一となるものが、個人の「心」であり、生命である。一家の「心」は夫婦、親子の大如全一であり、一門一族の「心」は祖先と子孫の大如全一である。一國の「心」は君民和合、大如全一であつて、世界の「心」は、共存共榮の眞の平和境である。

地上に於ける生物、無生物の大如全一から、太陽系、宇宙の大如全一にまで徹底すること、宇宙の精神、すなはち神意に則應することであり、この「心」を人間精神に享受したものが「心」を得たと云ふのである。「心」と云ふ字は心臓の象から出た字で、その字に「心」を加へ、この「心」が心臓の原動力となるのである。「心」を得ることを平易に述べると、貝原益軒先生の「養生訓」にある、

「心常に主あるべし、心主あれば思慮して是非を辨へ、忿をおさへ、慾をふさぎて誤り少

し。心主なければ思慮なく、忿と慾をこらへず、恣にして誤り多し」

と云ふことになるが、更に、いま一步徹底した場合には、悟道に徹したとか、正覺を得たとか云ふのであつて、大宇宙の精神に悟入し、神人合一の境地に至るのである。

結局、「心」を得ることは、先以つて自己の生命を活かし、一家一族を生かし、國家を生かし、世界を生かし、宇宙萬有を生かす道であり、教へであり、生成化育の大原動力たるべきものである。易の辭に、「各性命を正して大和を保合す」と云ひ、或は「夫れ大人は天地と其徳を合し、日月と其明を合し、四時と其序を合し、鬼神と其吉凶を合す」とあるのは、人間と全宇宙との大如全一の境涯、神人合一の相を述べたものであるが、我が國家國民の大如全一は、云ふまでもなく億兆一心にする大日本皇國そのものであり、「やまとのくに」は「大和の國」と書くのも自らその意が明らかかな譯である。大和民族統一の表現は、長くも萬世一系の 天皇であり 天皇は國家萬民統一の中樞で、宇宙の中心神であらせられ、中心核子は、すなはち「心」であつて、忠臣愛國の國民道德の眞諦が「心」に歸するのである。「心」は、社會にあつては共存共榮の美風となり、慈悲慈愛の精神となり、至誠の根源とな

り、時代思想の匡正となるのである。

すなはち、「↓」は絶対無二の表現であつて、無限大無限小の表現であるが、「↓」は假想でなく、實體であることも明らかであり、「↓」の否定は、宇宙、國家、自己の否定であつて、宇宙、國家、自己の破滅となる。

大要以上の如くであるが、總て、ものごとの、殊に、神の絶対性を表現することは甚だ難しく、言葉や文字或は形に表はすことは、すでに相對である。「↓」も文字や形象に表はすことは相對であるが、絶対から觀れば實體であることを知る爲めには、直感によらねばならない。また相對から觀た現象の「↓」は、思索によつて理解し得るものである。結局、「↓」は信仰の對照となるものである。

なほ、「↓」に就いては、稿を改めて別の機會に詳述することにする。

(完)

412
5

昭和十六年七月二十五日印刷
昭和十六年七月二十九日發行

(以印刷代體寫)

編纂兼 發行者	中 島 章 順	大阪市北區會根崎上四丁目六二	↓ 心會
印刷人	小 林 積 造	大阪市此花區龜甲町二丁目六二	
印刷所	小 林 印 刷 所	大阪市此花區龜甲町二丁目六二	
發行所	↓ 心 會	大阪市北區會根崎上四丁目六二	

終

